

三河アララギ

平成二十九年

二月号

第六十四卷 第二号



ニューヨーク日記(124) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

HAKATA TONTON

Blue Shoe Diaries



寒い時って鍋って食べて温まる。当たり前よね。ニューヨークで一番おいし〜博多トントンでゴラーゲン鍋。お肌ツルツルになったかな？

Hakata Tonton Hot Pot – collagen broth, tofu, dumplings, vegetables, berkshire pork belly and tonsoku.

Perfect for a cold night, aaaand great for your skin ? Yummers!

目次

第六十四卷第二号(通卷七五八号)

表紙・白椿

ニューヨーク日記(124)

黄素馨の門

歌集「はゞきくさ」III

歌集「草々」

歌集「はゞきくさ」I

ほそまひ雲

富士山の

御津川

安納芋

時代の変遷

木守柿

山里

2016年

幾代の

献立

実万両

在所

柚の香

生き甲斐

さる年師走

玉葱

踏襲

三輪山(4)巻向穴師

歌集「夢のつづき」

輝春・大多喜城

今泉 由利(1)

Blue Stone(2)

御津 磯夫(4)

大須賀寿恵(5)

今泉 米子(6)

河原 静誠(7)

岡本八千代(8)

今泉 由利(9)

弓谷 久子(10)

内藤 志げ(11)

林 伊佐子(12)

安藤 和代(13)

青木 玉枝(14)

伊藤 忠男(15)

鈴木 孝雄(16)

清澤 範子(17)

森岡 陽子(18)

白井 信昭(19)

足立 晴代(20)

阿部 淑子(21)

近藤 映子(22)

山口千恵子(23)

杉浦恵美子(24)

夏目 勝弘(25)

水上 信子(26)

高橋 育郎(27)

『いとよせ』

いーはとぶ

鈴木美耶子(28)

吉見 幸子(28)

牧原 正枝(28)

石田 文子(28)

森 厚子(28)

山崎 俊子(29)

三田美奈子(29)

水野 絹子(29)

牧原 規恵(29)

稲吉 友江(29)

現代学生百人一首

東洋大学

大橋 和真(30)

大西 理久(30)

飯岡美穂奈(30)

豊田 汐梨(30)

山内 彩愛(31)

寺田 航太(31)

山口 響(31)

本多 怜(31)

平野しづよ(32)

森岡 陽子(33)

白井 信昭(33)

山迫 京子(34)

森岡 陽子(34)

田中 清秀(34)

重野 善恵(35)

今泉 由利(35)

松本 周二(35)

米田 文彦(36)

柳田 皓一(36)

山元 正規(36)

植村 公女(37)

岡本癪三酔(37)

田中 清秀(38)

丸山酔宵子(40)

米田 文彦(42)

ある自然科学者の手記(57)

大橋 望彦(44)

絹の話(75)

短歌に詠まれた茂吉 六十五回

楽しい時間(51)

漢詩研修(4)

『歴代天皇御製歌』(七十)

『氷魚のことから(193) 岡本八千代(57)

編集室だより(二〇一六年十二月)

三輪山(4) 巻向穴師 夏目 勝弘(56)

『水魚のことから(193) 岡本八千代(57)

野菜の花(8)

三河アララギ(58)

お知らせ「三河アララギ」について(60)

鈴木 孝雄(59)

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御津磯夫

父の醫を繼ぎて老ゆけばこの冬も乏しき海苔をもらふたのしみ

もちの木やしげみにかくるる山鳩もひよどりもそれぞれの目的をもつ

赤坂を過ぎて沿ひゆくしらじらと枯れ藪つづく山陰川に

さし交はす木蔭の徑は黒門にいたるを知れり羊齒にふれつつ

萩の寺まもりし代々の僧の塔やや高き七世がわれにしたしき

わが祖の敗亡のことも記したり干時とくに慶長二年酉三月穀旦

この寺のいく代の僧の叩きうちて破れし魚板の下をわがいつ

凍らざる水をたのみて掬ひあぐ龍源檜葉の赭き實生に

小さき炎消えてゆきつつ立ちのぼる白きけむりのたちまちにして

をりをりに風に散る花ひよどりの枝うつりつつこぼす花びら

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

蛇の鬚の細くゆたけき葉群より直ぐ立つラッパ水仙の金

烏か鳥か原稿にルーペ上下して歌誌校正のなかなか進まず

縁談の断り云はむ人を待ち花持ちはじめしブロッコリー摘む

あからさまに血液型など持ち出して娘の縁談をわが断らむ

かいかがみ入りたる樹下の冷え冷えし小晴き中に朱^{ざばん}欒を拾ふ

去年挿し莖ひからびしデンドロビューム節々芽吹く花蕾を持ちて

体重をかけてわが背を圧しくる処女子の掌のあたたかきかな

痛む背を圧しつけくるる掌のぬくみはわれの骨に浸み来る

くらやみを冷えし空氣の寄せてきて寝てゐるわれの肩をさいなむ

庭隅のかぜくさ叢の枯れ枯れて五月の風にゆれ止まずをり

歌集「草々」

今泉米子

伊良湖岬の海の荒磯に潜みゐてうちむらさきと名づきし貝よ

花あしび昏れのこる雨の窓明細書つひに書き終りたり

もり上るあしびの花の房みじかし過ぎゆく日々の平凡にして

大きな家守り老いつつ疲れつつ淡々として寂しと云はず

都立高校に受かりし知らせ鶉の囀るこゑの今朝はやさしき

庭山の赫ら杉より五位二つ翔び立ちゆけり曇りのそらに

庭木立の中に瘦々やすやすの山櫻ましろき花に夕光のさす

未だ残る櫻の花に風強き夕べをはやく戸を閉ざしたり

枯れ残る細き梢の花蘇芳大明竹と共にゆらげり

雉鳩の梢に止まり動かぬを云ひたるのちに何を爲したる

歌集「はゝきくさ」I

河原静誠

姿のみ僧衣まとへど吾が心うつろ多きに病魔のひそむ

みほとけの慈悲のまなざし仰ぎつつ法然教学にひたすら励む

焼跡に園舎再建なりし今日幼児とともに園歌をうたふ

赤き青き色さまざまに塗装せし新たなる園舎に今日より遊ぶ

彼岸会に日想観法修せむとて夕焼け空をわが仰ぎ観る

廻診のドア開かれし一刹那かすかな鼓動に傷のうづける

紙灯籠千羽鶴など折りたたみ静養の日の今日も暮れゆく

薬包紙をためて折りたる千羽鶴千羽にちかし朝の風に舞ふ

病棟のかこむ中庭明けそめて泉水に緋鯉の飛び跳ねるみゆ

吉水の法灯うけし興福院に友らづどひて語るは過去の日

ほそまひ雲

蒲郡 岡本八千代

卷雲のほそまひ雲のたなびけりああ助川先生深空^みのいづくに
仰ぎたるけふの深空^みの碧き中ほそまひ雲の少しづつ動く

白き糸細く巻きたる細卷雲を露伴名付けて「ほそまひ雲」とぞ
思ひ出は遠くも近くも思ふもの啄木学会へ行きにしかの日よ
われをかも院生大学生の仲間とて賢治と啄木の里をも巡りき
石をもて追はれし啄木の宝徳寺かの芋子汁^{スペイン}旨かりしかな

ま向ひの西班牙^{スペイン}人夫婦のにこにこに吾もにこにこ芋子汁啜りき
ま白きの手拭の文字濃紫^{こむらさき}「盛岡市南大通二丁目」

土産にと買ひて来たれる啄木の壹卷壹号の「小天地」を開く

ほそまひ雲動くとも見えず海の方せめて先生とのつながりなのか

富士山の

東京 今泉 由利

日本より脱出といふことでなし外つ国にて長く過しぬ

巡り来し地球の品々囲ひもちつづけてゆかむ新しき年

寒風の桜木並木をゆきゆきぬこの木々のもつ色素に至る

雲ひとつ無く暮れゆきぬ大晦日雲ひとつ無く新らしき年

宝永の噴火のあとは真正面富士山元旦映像とどく

元旦の朱に輝やく富士山は二百キロほどスピードのなか

一陣の風のもたらす粉粉は六角をして雪の結晶

富士山の溶岩層を漉しきたり天然パナジウムの水を飲み飲み

苔むして蕩けるほどの狛犬を探し得たりて東照宮

華厳なる滝の飛沫に濡れもしてはじまるはじむる私の今年

御津川

豊川 弓谷 久子

御津川の鯉に混りてヌートリア一匹が住むと子より聞きたり

子の携帯に写りし小さき動物は待ちゐる我に姿を見せず

御津川のほとりに暮して御津山を仰ぎて過ぎし我が半世紀

浮野川と地名にて呼びし御津川に蛍舞ひゐし夜もありき

子供等が小鮒を追ひしこの川も今大鯉の群れ泳ぐ川

木立の中のせせらぎ静かな御津川もさま変りたり世も変りゆく

はっきりと柚子を浮かべし湯につかる一日おくれの我が冬至の夜

貰ひたるケーキは三越のモンブラン子と分け合ひぬクリスマスイブ

縫えるうちにと今日もミシンに向ひをり作る楽しみ噛みしめながら

子のパジャマ次はスカートその次はと思ふが楽し作るが楽し

安納芋

豊川 内藤 志 げ

草の径に隙間なく落つ団栗を踏みならし一人藪沿ひをゆく

わが畑の葱の芽生えを確めに藪沿ひの径ひとりたのしむ

高くより樺の枯葉肩に散る一人の径をカリカリと行く

朝の径腰かけ休む所にて大き落葉が電線に舞う

本宮の頂き隠し流れゆく霧雨見ゆる早く早くと歩む

椅子に立ち背延びして出す大き鍋安納芋の切干を作らむ

ストーブを出しし今宵は早速に安納芋の鍋をのせたり

切り干しにと熱つあつ諸の皮を剥く終りの一つ肩痛みくる

軒下に畚^{ふこ}を並べて晒し置く本に教はる切り干し諸なり

干し網に並べる諸は飴色に網に張り付き^{つま}抓み食いする

時代の変遷

岡崎 林伊佐子

挽ぐこともなくて残れる柚子の実が夕陽をあびて里に彩どる

若き日に夫と植えたる杉檜大樹となりて旧家をつつむ

ふる里の杉の木の上に廃家が点在している時代の変遷

住まざれば村の電気も止められて静寂となるわが古里は

若き日に生計立てし農機具もさびさびとして納屋に残れる

山道に落葉は厚く積もりゐてくぬぎ林も木もれ陽のさす

半生を耳癢ひままに越えこえていつか身につく読唇術が

苦労苦の苦をのりこえて難聴の嘆きもはるか老いとなりたり

生れたる双子のひ孫は女の子父母祖母たがふ夢を賭けおり

豊作の大根畑にかこう時となりの町空夕茜さす

木守柿

豊川 安藤 和代

賑やかな鶉の群去りゆけば皮のみ残る木守柿見ゆ

明けやらぬ氏神の庭鎮もりて吾が靴音が社殿に響く

柏手に夫の快気を祈りたり数羽の鳩が飛び立ちてゆく

校名に教諭記されし孫の名詞吾れの宝と深く抱きしむ

宿舎から孫のメールの「帰ります」夕食支度ルンルンでする

犇めくも蠢めくも吾読めたれば孫にすごいとほめられし今日

体調のすぐれぬ夫との通院は道のり長し時間の長し

春来れば暖かくなればと励まして夫に三度目の春の訪れ

網を切り脱走したる犬いづこ保護センターに尾を振りており

なよなよと風に揺れいて豌豆の吾膝丈に伸びて花もつ

山里

新城 青木玉枝

山里に住みて二度目の初春を身に沁む寒さと侘しさの日び

独居部屋に話す人なくベツトにて過ぎ去りし日び思ふ一こま一こま

独り居はラヂオのニュース深夜放送耳せん付けて独りの楽しみ

知らない土地空気のうまさ格別なれど都会の雑音恋しき夜は

名も知らぬ草花を見る窓辺にてこんなに知らぬ草原の花

青々と緑の続く草原も回毎に枯れ原と移りゆく庭

荘と言ふ小箱の一つはわれ一人自由な部屋にて部屋の飾りも

まさかまさかこの山里に老いゆくを夜空の星にきいて夜々

独居の生活で色々覚えたり女の仕事の如何に多きを

縁^{えにし}と言ふ糸につながれ糸も切れこの世に残る一人の侘しさ

2016年

大阪 伊藤 忠男

テロの年貧困格差恨むのかさりとて非道あり得べからず

祝い酒お節に雑煮門松も要らぬ喪中は寂しものなり

一年の一年ごとに体力の衰え感ず今日のこのころ

絶対の絶命のがる右隅にシャトルが決まり勝ち引き寄せる

都政道答えがありて理屈なし騙しはぐらし沈静化待つ

今年また雪に豪雨土砂崩れ異常と言えぬ異常な気象

インタビュー受けて涙に顔崩れ友の支えと言ひて更なり

凍り付くフロントガラス削るには要らねど活きるテレフォンカード

野辺山に事件ありとは似つかわぬ甘いキャベツの良き思い出が

北風の強まる中で対話すら見通し立たぬ新しき年

幾代の

沼津 鈴木 孝雄

冬の朝ふわりふわりとしろばんば青白色の飛翔何処へ

御座所前雨戸音立て締められる幾代の習わし今日も続く

老妻を車椅子引き電車に乘せ老夫微笑み横で見守る

お爺さん老いた犬抱き階段を老々介護はペットと人にも

そら豆を半身外に出し植え付けるやがて実が裂け芽を覗かせる

カタバミの草地に有って高く伸び平地に有っては広く延びる

菜園の境を彩るイソギクの花早めに刈り取りお札肥施す

菜園のサンチュの葉っぱが千切られる鳥の世界は食料難か

初霜でサニーレタスが真っ白に見事な造形やがて陽に解ける

昨日の強い雨風嘘のよう倒れた菜ばなの幹立て直す

献立

春日井 清澤 範子

磯夫先生の歌集「錦木」読み終へてたつくり炒^いらむと台所に立つ

庭椿の蕾つけゐる枝ぶりを残し庭師の剪定終る

枯れ果てたる薄は穂先を丸くしてゆれるを見つつ堤防を歩く

今の月の歌作らむと窓の外風音聞きつつ暫し目を閉づ

高気圧に覆われし今日夫と来て八王子神社に響く拍手

堤防の桜紅葉は散り落ちて川面を低く白鷺の飛ぶ

堤防の薄の枯穂の間より流れる水面光りてゐたり

舞ひ落ちる柿の枯葉の赤黄色庭を掃きたり日に幾たびか

ジャガ芋と旬菜の味噌汁美味かりし吾の血圧安定してをり

ねじ巻の柱時計はチクタクと明日の献立思ひて眠る

実万両

東京 森岡陽子

時雨るるか夜深けに聞ゆ粹な声三味と小唄の市丸姐さん

江戸小唄座敷でさらりと唄われし大川端の柳橋艶事

窓越しに青白色に光りをる空を占領シリウス一つ

魯田^{ひつじだ}に野球チームは立ち並ぶ用事の済んだほおけた案山子

実万両色付くを待つ野鳥達時折り来たり実を覗き見る

クリスマス迎へる町の賑やかさ此処も彼処もキラキラキラと

聞へ来るそこはかと無し鳥の声荒涼とした苑の真中で

碇泊す横浜港に豪華船乗客訓練甲板に並び

ぎんなんと銀杏落葉の混じり合ふ港に続く路を敷きつむ

ワアアアアトンネル内の響く声園児ら揃い走りてさけぶ

在所

豊川 白井 信昭

犬のハナまだ玄関にいる気配名を呼んでみるもう一度呼ぶ

今年またスーパームーン最接近こそ去年にも増して明かるき輝き

東大塚旧道を行く中にして四季桜また十月桜とも

秋の日をスーパーまでの道のりに皇帝ダリア今を盛りと

わが背を優に二メートル越し伸びて大輪咲きの枝もたわわに

御津山の左半分ことごと悉く色づく紅葉もみじ師走に入りて

橋の上にクレーンひとつ先伸びて初冬の空に屈く工事音

わが在所掘ほりぬき抜の井戸に自噴水湧き出しことも遠き思い出

道ひとつ隔てて囲む垣根よりアヒルの迷い来たれし在所

水神の弁財天を祭る池大方埋まり小じんまりと

柚の香

東京 足立 晴代

冬の空満ちた月に流れ雲いづこも師走忙しきかな

凍てつきて身に沁む寒さひとしおに老をしみじみ感じたり

柚の香にたゝみ一目の春近く明るき歳を待ち望むなり

酉歳の娘に幸をと念ずる親の心変らじ

ポインセチア寒さに負けず赤々と緑の葉にも息吹きありけり

弱し足昔を想い励む日々気合を入れて冊伝歩き一、二、三、四

今年こそ健かならんと祈りつつシャッキリ体そう元気よく一、二

卒寿となりて驚きぬ心は変わらぬ若人の時と

ケガしても直りは早くシャキリの五年続けし効果ありあり

生き甲斐

横浜 阿部 淑子

たおやかなモーツアルトの曲をかけ始めた整頓気づけばさっぱり
サプリメント二か月ごとに届け来て付録にぬり絵脳トレ気ぜわし
「ウアー見えた」と歓迎される一言^{ひとこと}が生き甲斐となる我が身にとりて
レストランにて隣席の父と子と黙黙好みのメニュー平らぐ
骨折の痛みや病を越へし友「踊りも短歌もすなりよ」と笑む

さる年師走

名古屋 近藤映子

仏壇に黄菊白菊桔梗薄白百合とくに明るし

霜月と言えどもまだまだ室内は23〜24度の秋の候

この八階早や三十八年余り過ぎ歩道の木々は延び上り来ぬ

ベランダに干物取り入れふと見ればカナダ楓は七階あたりに

デイズニーランドのメリーゴーランドに子等と孫共に上下に

科学は進めど何時来るか地震の予知は今だむつかし

ポインセチアの一鉢は今年の師走もルームに輝く

重症筋無力症は甘からず神経内科医の治らんの声

師走なり室内20℃を切る朝は右手は動くを忘れをり

此年は秋日は短く師走そうそう寒い日の続くよ

玉 葱

豊川 山口千恵子

石路の黄色鮮やか庭の隅わが冬庭を彩どりてをり

今年こそ大玉作らむといきごみて玉葱植ゑむ黒マルチ敷く

白菜のずっしり重き一つとり抱へ持ちつつ心は楽し

みじかめの大根なれど味の良し今年播きたる種一袋

新しき新藁匂ふ注連縄よ夏目先生すこやかなりし

踏台に乗りて玄関に掛け替へる今年も注連縄送り下されし

南天の房実あかあか美しかりき一粒残らず喰ひ尽くされぬ

葦の間の早き流れに鴨の群流さるるごと白川下り行く

ローソクを二本持ち行きわが組の秋葉神社の常夜燈とす

新しき御札もらひてわが嶋の秋葉さまのお日待終はる

踏襲

蒲郡 杉浦恵美子

見渡せば晩秋の色深まりぬ検査結果がシロの翌朝

知らぬ間に野菊も枯れぬ見る度に一枝剪らむと思ひし間に
半年もぶら下がりとる藤の莢を剪れば乾いた音して落ちる

数十年使ひし座椅子頂きぬ使ひし人のかたちによつぱり

この蒸し器母が用ゐてゐしものぞ空にかざせば鍋底に穴

我が厨鍋皿小鉢殆んどは母より踏襲これにて足れり

新聞のお節料理の特集につひ目を凝らす作るあてなきに

糸魚川大火を知りぬこの街を夫亡き後に歩きし日あり

糸魚川白身魚の鮨旨き店あり無事かこの大火事に

糸魚川白身魚の鮨旨く我が夫幾たび称へしことか

三輪山(4) 卷向穴師 豊川 夏目勝弘

綿密にたてし計画も一瞬にて破り降りたり卷向の駅

あてもなく駅を出で行き道端に人麿屋敷跡の石柱がある

我が内に謎となりゐし人麿の一つが解決うれしかりけり

急坂を上向き歩む目に止まる相撲神社の野見の宿禰

優勝を決めて土俵に仁王立ち豪栄道の姿が浮ぶ

卷向の穴師の里を巡ぐり行く跡絶ゆることなく瀬音のひびき

道下より聞こゆる瀬音に下りて行く危ふき橋に一時を立つ

卷向の穴師の家並に柿本の名字を見つくもしやの妄想

卷向の穴師の里の家家の造りの確か大きくもあり

一本の大きな柿の木に赤き実一つ虫食ひならぬ三輪山に向ふ

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

青海湖の真青は空にまぎれこむ三千メートル鱗なき魚

結界にはためく五色の三角旗わが行く末に心の揺るる

北京より里程路傍に刻みつつ青蔵公路はラサへと続く

チベットの遊牧民は悠々と高速道路を羊と渡る

人に乗せ期待を乗せて天空へ青蔵鐵路は銀河を走る

列車旅の醍醐味なるか異文化の人との対話筆談やよし

ひたすらに五体投地をくり返す寺院の隅に老婆ありけり

摩尼車を回し道行く巡礼の聖地をめざすまなざし清し

四年越し悲願叶いてポタラ宮画竜点睛わが足にて立つ

黒瓦の屋根をつらぬる街ひとつ世界遺産の名にて賑わう

輝春 大多喜城

1

夷隅の山は 浅みどり

朝日に映える 天守閣

光まばゆき 金の鯨

要害堅固な この砦

輝春大多喜城 この勇姿 この勇姿

2

戦国武将に ならびなき

英傑 本多忠勝が

栗又の瀧に いやまして

築きし城は 木隠れの

愛惜尽きぬ 夢の跡 夢の跡

3

想いは遥か メキシコへ

太平洋に 友情の

虹の架け橋 渡したる

御宿砂丘の 石碑に

誉れは永遠に 刻まれん 刻まれん

高橋育郎 作詩

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

絨緞の下より出で来トランプのハートのキングは孫との思ひ出
君の華展見に来て記帳せんとする筆ペン持つわれぎこちなくして

鈴木美耶子

少年と乗り合はせたるエレベーター声掛けたれど無言のままよ
青春のただ中に居るセーラー服の少女らスマホ持つ手動かす

吉見幸子

石積み溜池の中の島一つ山狭の今日の日の当たりつつ
溜池の沖に建ちゐる石島居水位のあとはおぼろげにして

牧原正枝

会場の百合のかをりの流れくる今日の文化祭終はらむとして
想ひ出の家壊されて更地なり風吹く中に今日の地鎮祭

石田文子

吾が庭の木犀の香につつまれてひとり佇むけふのわれかな
空澄みてけふは吾が子の地鎮祭祝詞の声よ神に届けよ

森厚子

十六夜の残月未だほの白しああ我が今日の一日の始まり
ホシハジロ海にもぐりて藻を食みて上がりくる間よ吾も息とめて

山崎 俊子

「こどもの国」のミニSLが走りだすけふも汽笛がほそぼそ聞こゆ
海苔網の張られし浅瀬いまは無く竜田の浜の冬草あはれ

三田 美奈子

立ち並ぶ南京櫓は紅葉^{もみぢ}して逝きにし友を重ねるこの秋
秋桜の優しくゆるるその中に微笑む地藏のあどけなき顔

水野 絹子

わが畑の手入れせざりし菊の花一度に咲きて一度に散りぬ
今日も又渡り来たりてホシハジロ真冬の海に群れてゐるはや

牧原 規惠

穏やかな童女の如き顔をして昼寝する老母^{はは}に冬の陽やはらか
如庵にて燃ゆる紅葉を眺めつつお茶飲む我らにひとひらふたひら

稲吉 友江

現代学生百人一首

東洋大学

休暇取りゴルフ楽しむ一方で世紀の発見世界を救う

慶応義塾普通部一年（神奈川県）

大橋 和真かずま

山里に静かに響く踏切は今日も寂しく旅人を待つ

慶応義塾普通部三年（神奈川県）

大西 理久りく

スマホとは私の欲をふくらますまるで小さなブラックホール

捜真女学校中学部三年（神奈川県）

飯岡 美穂奈みほな

大空に一人で浮かぶ雲に問う「あなたも進路に迷っているの？」

神奈川大学附属高等学校一年

豊田 汐梨しお

日本食ホームステイで思い出す祖母のだしつゆ母の豚汁

鎌倉女学院高等学校一年（神奈川県）

山内彩愛^{さえ}

折れにくい心に変えてみたかつて7mmにするシャーペンノック

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）

寺尾航太^{こうた}

午前四時レスキュー派遣される父玄関ドア音私は聴いてる

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）

山口響^{ひびき}

閉校の小学校のインターホンかすかに鳴って思い出を呼ぶ

東京学館新潟高等学校三年（新潟県）

本多怜^{れい}

私の一首

ユリの木の大本となりし目に入りぬ博物館の庭の一本

平野しづよ

新聞に篆刻の記事あり上野まで行きてみんなかと思ひ立ちたり

上野まで一息の間と思へども送り迎へを子に頼みたり

「三河アラギ」発足の頃よりご活躍下さいました「岩瀬すすへ」さんのご息女、東京亀戸に在住される「平野しづよ」さんと、切っ掛けがありました。そして近詠をお届け下さいました。

次あれをその次此と見込み立て暮に向ふが思ひは成ず

森 岡 陽 子

毎年〳〵十二月に入ると先ぐ予定を立てて、何でも早めに片付け様と思うのだが、予定通りに行つた事がない。最初に日の良い時に神棚の掃除から。そして〳〵…

何時も迫つてからバタバタと動き出してしまふ。今年の十二月もそんな予感がある。

大王松そびえ立ち立つ庭にして藤の花咲きツツジ咲き春はさながら錦なりけり

白 井 信 昭

小学生の頃、在所の隣の屋敷を象徴する様に、一本真つ直ぐな太い大王松がそびえ立っていました。そして、毎年五月頃になると、ツツジをはじめ色鮮やかな花々が咲き揃います。

うす紫に咲く藤棚には、無数の長い花房が垂れ、その眺めはすばらしく見る心を惹きつけ樂ませてくれました。

『俳句』

冬晴や膝掛置かれカフエテラス

山 迫 京 子

数へ日や夫婦連れだちデパ地下へ

寒禽の二羽電線を横歩き

一陣の風荒涼と冬木立

森 岡 陽 子

坂道の落葉飛び越ゆ神田川

数へ日を指折り数へごろ寝かな

冬日差す白木作りの観世音

田 中 清 秀

寒風に重なり落つる滝しぶき

東雲に鳥影過ぎる冬日かな

遠き日の母偲はるる葛湯かな

重野善恵

オリオンに射られゐるかに星凍てる

霜枯や葉裏に虫の潜みゐて

鰯^{はたはた}の酢締めを添へる宴かな

今泉由利

白長須鯨とまがふ冬棧橋

海鼠腸の長し長し長きまま

切干や九十九里より縮まれり

松本周二

荒波の犬吠埼に返り花

灯台の白や日本の野水仙

恙なく手足伸ばせし柚子湯かな
やはらかに翹たたみけり冬の蝶
数へ日の予定のひとつ蕎麦と酒

米田文彦

宿に着き風花となる草津の湯

柳田皓一

数へ日のできることのみ指を折る

冬茜薄れ消えゆき黒き富士

ゆつたりと流るる空や蒼鷹

山元正規

湖の面をわたる晩鐘冬霞

小春日や鯨の背とふ大栈橋

会釈して擦れ違いをり冬紅葉

植村公女

まん丸の波郷の眼鏡冬灯

野球部の皆丸坊主冬暖

自由律俳句

岡本癖三醉

石一つぬれては乾いては菖蒲の咲き

平らな石に日のあたり土用落葉掃き

汐のさして来て芥のよせて来ておはぐろ蜻蛉とび

うしろを見ても誰もゐない野萩の花の風ふき

夕日が一つ石にいつ迄も當りつゞけ犬蓼の花

かさね吟行会

「横浜みなとみらいベイウオーク」12月

田中清秀

トランプのカードの名前を愛称に付けた古い建物が横浜にある。キングの塔（神奈川県庁本庁舎）クイーンの塔（横浜税関）ジャックの塔（横浜開港記念館）という「横浜三塔」、関内地域で横浜港のシンボルとして親しまれている。今回のかさね吟行会は初冬のみなとみらい地区を散策した。

みなとみらい線の日本大通り駅に十一時に集合、風が少し強いが秋晴れの絶好の吟行日和である。まず、日本大通りの銀杏並木周辺を散策する、ほとんどの銀杏は散り終わり歩道には銀杏の実と黄葉が散り敷かれて、写生グループの何人か真剣に絵筆を走らせていた。その後、大さん橋に向かう途中で横浜開港資料館を覗き一八五四年ペリー提督二度目の来航時の様子を描いたリトグラフや記念に植えられた大楠などを鑑賞する。また、周辺は波止場街の雰囲気を残したカフェやレストランが並び異国情緒を醸し出している。

晴天にふりやまずして木の葉雨

桎梏に落葉の積もるカフェテラス

由利

清秀

風あるに無駄とおぼしき落葉掃き

皓一

大さん橋には日本郵船の飛鳥Ⅱが停泊しており、その巨大な船体は見る者を圧倒する。全長二四一メートル、乗客八七二名、乗員四七〇名の日本最大のクルーズ客船である。他にもオーシャン・ドリーム号や観光船ロイヤルウイング号が停泊中で棧橋は華やいでいた。この大さん橋は波のうねりをイメージし水面に浮かぶ「鯨の背中」に模して作られ、屋上にはブラジル産の木材を使用したウッドデッキと天然芝の緑地を設け船と陸地の融合を図っている。ここから見る港の眺めは、遠望されるビル群と海と空のコントラストが鮮やかで、晴天の下素晴らしい景色である。また、棧橋内の出入国ロビーは一切柱を使わない大空間となっており、さらに壁面は強化ガラスのウォールで、広々とした優しいイメージを演出している。

大棧橋うなりて抜ける冬の風

素山

船縁を洗ふ波音小春かな

善恵

投錨し干し場となりぬ小六月

周二

大さん橋に続く象の鼻パークは象の鼻の形をした防波堤がその名の由来となるが、特段の有名なものではなく「がっかり名所」とも言われているらしい。ただし、こ

の防波堤から件の「横浜三塔」がすべて見渡せる貴重なビュースポットであり、観光客の人気となっている。象の鼻テラスで売っているゾウ・ハナソフトクリームを食べながら家族で談笑するのは楽しいかもしれない。

続いて訪れたレンガ倉庫ではドイツのフランクフルトをイメージしたクリスマスマーケットが開かれていた。クリスマスツリーやヒュッテ（木の屋台）、作雪機からの大雪を被る雪だるまなど子供達のはしゃぐ様子が微笑ましい。夜のイルミネーションは恋人と行きたい場所の一番に選ばれている。また、レンガ倉庫の中のショップピングモールでも様々のお土産品や飾り物が売られている。平日にも関わらず混み合ったモール内のビューフェで、我々も昼食をとることとなった。

イベント場客寄せとして雪達磨
手を振るはサンタクロース船の上
洋食の忙しき昼餉漱石忌

さち子
陽子
正規

レンガ倉庫から更にランドマークタワーに向かって、海辺の歩道を寒風にさらされながら急ぎ足で進む。北風ではないが風はかなり強い、やっと正面に「帆船日本丸」が白い優雅な姿を現す。昭和五年に建造された練習帆船で五十四年間の現役生活の後この地の石造りドックに固定保存されている。地球を四五周余り航海し、延べ

一一五〇〇人の航海実習生を育てている。

帆船の帆の畳まれて年の暮
帆船に無数の口ブ冬日和

京子
文彦

本日の句会場はランドマークタワーのドッグヤードにあるレンタルルームで行われた。入口が分かり辛く全員揃うには手間取ったが、句会は予約の二時間で何とか納めることができた。終了後、居酒屋風のレストランで杯を捧げ、本年最後の吟行会をお開きとした。

今回の吟行文は横浜という異国情緒がなせる技なのかカタカナ文字が多くなり、読み辛くなった点平にご容赦頂きたい。

■かさね吟行会■

日時 二月十日（金）

場所 豪徳寺 松陰神社

集合 豪徳寺 正面入口 11時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（五八）

丸山 酔宵子

う愛称も持っている。池畔に一周20分ほどの遊歩道が廻（めぐ）らされ、天皇陛下が軽井沢に来られると必ず散策されとのこと。

『紅葉と温泉と蕎麦と』
関越道の富岡を過ぎ横川あたりに来ると、山々は黄色や赤に変わり秋が深まってきているのがわかる。標高947メートル、軽井沢雲場池は紅葉真っ盛り。9月中旬にナナカマド、10月にはカエデやツタなどの朱色、カラマツの黄金色、下旬ごろからモミジが色づき、11月ともなると、池周辺に植えられたドウダンツツジが真っ赤に色づき、池面（いけも）に映えるくれなゐと相まってまさに桃源郷。

雲場池は瀟洒な別荘や美術館のある六本辻の、御膳水を源流とした小川をせき止めて造られた細長い池で、地元では「おみずば」と呼ばれ、「スワンレイク」とい

平日とは言え、周辺駐車場には観光バスや自家用車で一杯。やつとこのことで駐車場所を見つけて池に向かうと、細い湖畔の道は大変な混在で、中国語が飛び交い、至る所で自撮りや他撮りのシャッター音。池面には周辺の雑踏と騒音も我関せずと、鴨の群れが悠々とんのびりと水尾（みお）をすえひろに泳いでいる。

晩秋の陽は、落ちかけると鶴瓶（つるべ）落として、一気に冷え込んでくる。冷えた体を温泉でと近くの野天風呂の千ヶ滝温泉へ。西武グループの堤康次郎が東長倉村（現軽井沢町）杳掛の公有林野60万坪を購入し、道路の新設、鉱泉の掘削、ホテルの建設や別荘の分譲などの事業開発の中核施設である。以前は軽井沢スケートリンク施設であったが、豪華な温泉施設に改造したのである。

近くには同じ西武の経営する、トンプの湯があるが、

これはいけますね・・・。

あまりに大衆化されて混雑するので、千ヶ滝温泉をよく利用している。利用料金は通常1200円であるが、住民特別割引で500円と割安である。澄みわたるかけ流しのやわらかいお湯で、大きな露天風呂は燃えるような紅葉にかこまれ、紅葉葉が、湯気にけむる湯船に浮かんでいる。「アア、いい湯だな・・・」

素晴らしい紅葉と野天風呂を堪能した締めには、やはり信州そばと地酒である。軽井沢のそばと言えば、明治3年創業、宮様をはじめ軽井沢に別荘を持つ著名人に愛された中軽井沢駅前にある「かぎもとや」が有名であるが、今回は中山道軽井沢追分宿、旧脇本陣「油屋」の向にある「古民家風な造りの蕎麦処「ささくら」」。信州みそと辛味大根のしほり汁「おしほりそば」が絶品だが、酒のつまみも豊富。まずは、信州佐久の日本一小さな酒蔵「戸塚酒造」の「寒竹」。この温る燗、アア沁みます・・・。

くれなゐに映える池面（いけも）に

鴨の水尾（みお）

酔宵子

本からのあれこれ(15)

米田 文彦

「辞書」

本というものは場所をとる。買って失敗したな、という本は古本屋などへ処分しやすいが、手元に置いておきたい本、愛着のわいた本は自然と増えてくる。

今どきのスマホやタブレットで読む電子書籍、これは場所を取らないという大きなメリットがあるのだが、私などはやはり物理的な重さを感じながら本を読みたい。

昔に買った本で日に焼け、読むに耐えなくなった本、若い頃に心を動かされた本でも数十年経つてみると不要になっている本、いろいろある。読んで「これは十分解った、自分の中で消化した」という実用本も処分しやすい。

ということ、愛書家でない私はときどき本棚の本を入れ替え、処分したりもしているつもりなのだが、それほど目立って成果はない。

一番処分しにくい書籍、それは辞書である。これも一種の実用本だが、辞書を「これは十分解った、自分の中

で消化した」ということにはならない。無理だ。

どの家庭でも同じと思うが、国語辞書、漢和辞書、英語辞書、古語辞書、いろいろの辞書辞典、処分できない。数年前やっと高校時代の独和辞典を処分した。思い切つて。もうこの年齢でドイツ語を勉強することもなからうと。

「使い切りたい。この辞書の中にはまだまだ知らないことが詰まっている、もっと使つてやらないと辞書が可哀相だ」という思いがある。だから、逆に新しい辞書は買いたくない。これでは辞書編纂の趣旨からいつて本末転倒なのかもしれないが、気持ち的にそうなのだ。我が家にも妻が買った電子辞書がある、使えば便利なのは実感もするのだが、まず、紙の辞書を使い切りたい。

この広辞苑を使い切ったら次は電子辞書、などと思っていると当方の寿命が先に尽きるのは自明なのだが。

戦後の我が家に廣辞林という茶色の背表紙の分厚い辞書があった。開きやすいようにア行力行サ行それぞれごとに背に線が引かれ、随分使い込んであった。

書いてあることは百科事典的で、なんとなく読んでも

面白かった。

それを兄弟五人、父を含めて代々みんなが使ったものと思う。

我が家も戦後の貧しい暮らし、物を買えない時代、育ち盛りの多い家庭であれば辞書なんかに廻る金はない。学校に辞書を持って行かなければならない日も重たい廣辞林を持って行ったものだ。肩掛けズツクの鞆には入らず、別に手に持った覚えがある。

事情はどの家庭も同じで、ランドセルの子もいれば、教科書も弁当も全部を風呂敷に包んで来る同級生もいた。

辞書どころか、私が小学校低学年の頃の我が家には、雨傘は全員分つまり六本も七本もはなかった。だから、雨の日の末っ子の私は、小学校は近いからという訳で、田舎の富山で雪の日に被っていたゴザボウシ（莫塵法師）を頭から被って登校した。二枚のゴザをつなぎ合わせた被り物だ。帰るまで教室の後ろのフックに掛けておくのだが、流石に少し恥ずかしかった。そんな時代だった。

いま私が使うのは広辞苑または角川国語辞典のときが

多い。

広辞苑は結婚前の頃に買ったのだが、辞書に線や書き込みもなく、きれいなままだ。

しかし、この辞書は数年間我が家になかった時期がある。

会社勤めで転勤の時代も終わりの頃、妻子は一足先に東京に住み私は単身赴任していた。長女は高校生、慣れない東京の学校である。新しい友だちにも溶け込もうとそれなりに懸命だったろうと思う。「友だちに貸してくれと言われて約束してきた」と言って広辞苑を持って行った。そのまま二〜三年、ときどき「あれもういいでしょう？」ぐらい言っていたようだが、状況は変わらず。

結局、何年後か、はつきり「返して」と言ったように、辞書は我が家に戻ってきた。どういうことだったのか、若干いじめっぽい感じもある話だが、私は「娘はあの時は必死に廻りと戦っていたのだろう、そしてはつきり「返して」と言ったことでなにかを克服したのだろう」と考えている。

私はこのことについては何も言ったことはない。ただ見ていて、そう思うだけである。

ある自然科学者の手記(57) 大橋 望彦

『生・若・老・死』

32) 「大学院時代」(S 31・4・1～S 33・3・31)

丁度、東京都立大学大学院理学研究科化学科生物化学教室が開校するというので受験した。これが前代未聞のハプニングでドイツ語が白紙回答であったのに、合格してしまったのである。

筆記試験が終わり、個々の面接の際に、一番正面に居られる試験長(後で知ったが、物理化学の権威である千谷利三教授)が「大橋君は、ドイツ語が白紙で出ているが、出来なかったのか。」といきなり聞かれた。びっくりした。答案を見て、これは出来ると思ったのは覚えているが、答えを書かずに、苦手の英語の方の問題に取り組んでしまったのだろう。何ともへまな事をしてしまった。そうしたら、「君は、独協を出ているのに何故ドイツ語が出来ないのか」と続いての質問に、「実は出来ていると思ったのですが、何故答えを書いてなかったかが判らないのです。」と正直に答えた。周りの先生方は一斉に吹き出しておられた。「では、此処にどんな内容のことが書いてあったかを今簡単に話してください。」と言うことで、概略の答えをした。「ではこの本の序論を、声

を出して読んでみてください。」と一冊の本を渡された。見ると難しいドイツ語の本である。兎も角、意味がちつとも判らないが、読むだけは読んだ、そうしたら、「君はドイツ語が、よく出来るじゃないか、唯、おつちよこちよいだなあ」と云われ大きな声で笑われてしまった。その後は、科学の専門的な分析法の質問があつて、面接が終わった。控え室に帰ったら皆が一斉に小生の方を見ていて、「随分長かったが、何があつたの」と心配してくれた。もう駄目だと思っていたので、「いや、失敗だった。」と言って、早く帰りたいと思った。後で合格していたのは、偏に千谷先生のご厚意によるものと思ひ、感謝している。

この受験のときに、身体検査場でシャツを脱いでいると、真ん前に小学校時代の同期の廣川秀夫君がいた。「どうだい、受かる自信はあるかい。」と言うので、「否、判らん、君は。」と問い返すと、「否、俺も判らん。」と言ったが、小生は化学科に、彼は生物科にそれぞれ入ることが出来、それからはシヨツチュウと一緒に受講したり、お互いの部屋に往き來することとなった。

それが切っ掛けとなつて、今でも親しく付き合ひ、「ヘテロの会」という素晴らしい仕事仲間が出来た(詳細は後述)。それは、細かな専門はそれぞれ異なるが、学問の勧め方や、生命現象の追求では全員が同じように興味を分か合える会合組織である。不定期ながら会合を行い、常に六・七人のメ

ンバーが集まる。誰かが話題提供をするとそのテーマに楽しんでそれぞれの疑問点を出し合い、話がなかなか進まない状態となる。それでも喧々諤々と討論に花が咲くので、一人の話題提供が、延べにして六時間以上となることが屢であった。通常の学会では、このような濃い討議をする機会が得られないので、全員が楽しみ、貴重な意見を交わすことが出来るので、実になる会である。残念なことに、酒井彦一君と三浦謹一郎君（両名とも、東大名誉教授で、学士院賞を授与されていた）が既に故人となってしまった。実に貴重な優秀な人材であったので、わが国の損失と思える逸材をなくしてしまい、慙愧に耐えない思いである。

33) 「大学院の研究テーマ」

大学院での研究テーマは「タンパク質の一時構造決定法の確立。」材料としては、各種動物の赤血球からヘモグロビンを抽出、精製し、その一次構造を調べる（そのタンパク質を構成しているアミノ酸残基の配列順序を決定する）研究である。このタンパク質の一次構造を決定する為には、アミノ残基の特異的修飾法が必要な技法となる。その技法となる特殊な標識物質の開発として、トリニトロベンゼンスルフォネート（TNBS）の合成とその精製が行われた。

TNBSのアミノ基に対する特異的反応性が小生の主とした研究テーマとなり、その元となる標準品をまずは生成し

なくてはならなかった。そこで、20種類のアミノ酸をTNBSと反応させ、TNP-アミノ酸をそれぞれ合成して、全て結晶化させ、標準物質としてストックすることが出来た。この際にTNBSとアミノ酸との反応の特異性と、反応速度、生成物の安定性、さらに、タンパク質やポリペプチド等との反応性などを全て調べなくてはならなかった。これらのことを調べ、結果をまとめて、第十一回日本化学会（於東京大学）に発表することが出来た。これが学会発表の初舞台であった。

34) 「第十一回日本化学会に研究発表（初陣）」

研究発表の後で、赤堀四郎大阪大学蛋白質研究所々長のコメントがあった。「この研究は利用価値がともある。アミノ基のみに特異的に反応すれば一番いいが、 α 基にも反応してしまうという点で問題にしている。しかし、一次構造の研究に使うのであれば、蛋白の α 基と α 基は予め過硫酸酸化でスルフォン化しておけば、蛋白は一本化され、その側鎖のアミノ基だけが修飾されるということは、極めて今後の研究に役立つものである。」というものであった。斯界の大権威者である先生からコメントを戴けるだけで、光栄であるのに、更に、お褒めの言葉と一緒に、今後の方法までも教えて下さったことは、凄いいことで、その後も、これまでに経験したどの学会でもこのようなコメントは滅多に無いものであった。

絹の話 (75)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

野蚕絹と光の波長

●人の目の生い立ち

哺乳類は恐竜の跋扈していた6千万年前の頃は家ネズミ位の大きさと夜行性であったようです。従つて色の識別は生存にあまり重要な事ではなかったと思われます。人類の祖先がうす暗い森から平原で活動する様になって、人間として進化しはじめて30万年の間に遠くを見る視力と微妙な色の識別をする能力を得たようです。

以来人間は太陽光の下で、夜間は赤色の多い炎の光で色や微妙な艶を認知する目を育んで来ました。

ところが近年になって冷たく青白く光る蛍光灯が出現し、最近急速にLEDランプが一般的となり、光量が強くて冷たい光なので、多くの人が色の認知に混乱を来す様になって来ました。デパートなどで窓辺に品物を持って行つて外の光で色を確認する人も多々見受けられます。

これらの光は波長が短いので強いエネルギーを持ち破壊力も大きいのです。長時間これらの光の下で物を見ていると、網膜が損傷され危険があります。

照明ランプと光の色々

太陽光は波長の長い順に赤(800nm…ナノメートル)、橙、黄、緑、青、藍色がほぼ同じ位の量と少なめの紫(紫外線400nm以下)の七色です。

波長の持つエネルギーは波長が短いほど強く、破壊力も大きいのです。

蛍光灯は赤色が無く、ほんの微量の橙、黄、緑、紫色のほんの一部が特出した光で熱があまり出ません。

LEDランプは橙く紫まで少量ありますが波長の短い藍色の量が出していますので、青白い光が強烈です。

ハロゲンランプは長波長の熱を持つ赤色が非常に強く、橙く藍色まで低減して、短波長の紫はごく少量です。

●タサール蚕シルク(野蚕)と光の不思議

タサール蚕シルクは糸の中にタンニン類が含まれていて光が当たるとシヤンパンゴールドに輝き、太陽光に長時間さらされても色あせる事が少ない紫外線防御率の高い不思議な光沢のシルクです。

タサール蚕シルクに光が当たると、当たった光の紫外線領域の短波長部分(400nm付近)を中心に吸収し、当たった光の波長を500nm(青色)付近の害の少ない波長に増幅させて反射し、その差100nm前後の余剰なエネルギー

で反射発光すると考えられます。さらに余剰なエネルギーは熱に変換され放熱されると思われる。

その様なわけで1年間繭の中で休眠して動けない蛹を紫外線から守る事が出来るのです。タサール蚕シルクが紫外線避けに効果的といわれる所以です。

この余剰エネルギーを電気に換えられないだろうか、研究を始めたく思っております。

●ムガ蚕シルク（野蚕）と光の不思議

ムガ蚕シルクも糸の中の色素（不明）が入っていて、精練すると、人を魅了してやまない金色に輝き、紫外線にさらされてもほとんど色あせすることの無い希有なシルクです。

ムガ蚕シルクに光が当たるとタサール蚕シルクと同じ様な波長吸収をしますが、タサール蚕シルクよりやや高い吸収率を示します。ところが紫外線に近い440nm（藍紫色）付近の波長を有害な350nm付近の波長に変換してタサール蚕シルクより少し低い反射発光をします。

この事実は上記の理論では説明が出来ません。

ムガ蚕にはムガ蚕の進化の過程で獲得した生存の合理的秘密があるのでしょうか。

おそらく、100nm前後の不足エネルギーを僅かに吸収した高波長のエネルギーから補完されていると考えられます。

したがってシルクの温度は上がりません。

有害な波長を反射することで雑菌などの繁殖を予防しているのではないかと思えます。虫の食害はなく、日傘では紫外線避けに効果的で傘の生地も殆ど日焼けしません。

●反射発光のわけ

シルク繊維の中に入った色素とシルク繊維の蛋白質が結合して、短波長の光を発光させていると思われる。

繊維の中に色素のない白い家蚕では殆ど発光しませんが、絹を染めると染料によってそれぞれ艶の趣が違って来る事もその環なのでしょう。

●野蚕シルク販売現場

ムガ蚕シルクに赤色光量の多いハロゲンランプの光を当てるLEDランプ光源の下のムガ蚕シルクが輝きを増し、遠くからこの光に女性客が集まってくる。（男性の目はこの程度の微妙な光の差にはあまり反応しない）

これは短波長のLEDと長波長のハロゲンの光が混合して、太陽光の様な光域を作っているからだと思われる。

その効果はタサール蚕シルクの無染色ではやや薄れますが草木染めされたものはムガ蚕シルクと同じ様な艶が目視されます。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

六十五回

「月虹」 鯨島 満

十九 木下孝一 1

木下孝一は昭和二十三年にアララギに入会し、その師磯幾造が創刊した「表現」に昭和三十六年に入会した。そして師の没後も今日に至るまで同誌をささえてきた。師の磯幾造が茂吉を詠んだ歌については本誌平成二十七年三、四月号にとりあげた。

本稿は木下孝一の九冊の歌集のうち『光る稜線』『風紋の翳』『風に耀ふ』『夏の記憶』『光の中に』『霜白き道』の作品に基づいて書き進める。

桑の香のただよふ朝母の辺にありし茂吉の歌のふるさと
木下孝一『風紋の翳』平成七年
写生道と書きし茂吉の書を見れば筆の勢ひは墨飛ばし
しるつ
終戦のとき金瓶の村に在りし茂吉が麦藁帽かむりし写真
草鞋ばきなりし足もと麦藁帽かむれる茂吉土踏みしめき

この四首には「斎藤茂吉記念館四首」と註がある。この記念館が山形県上山市北町のみゆき公園に建てられたのは昭和四十三年であった。

一首目は「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる」に続く「桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり」（「赤光」）「死にたまふ母其の二」を踏まえている。二首目の「写生道」は茂吉が毛筆で書いた文字で記念館に展示されている。作者は茂吉の唱える写生を指針にして作歌を続けてゆく。茂吉が第二次世界大戦の日本の敗戦を迎えたのは疎開先の故郷金瓶であったが、ここで茂吉は三、四首目に詠まれたような麦藁帽子、草鞋ばきで過ごすことが多く、戦争が終わったことを直接に表現せず、「停戦ののち五日この村の畑のほとりにわれは休らふ」（「小園」）と詠んでいる。

茂吉ここに最上川の虹詠みけむといまだ冬木の丘に佇む
「風に耀ふ」平成十二年
「美しき虹の断片」をたどり読む茂吉の歌碑に薄ら日差しつ
歌碑ここに在りと尋ぬる寺庭の落葉だまりにかたくりの咲く

小題に「最上川」とある。茂吉が敗戦後の約二年間を

過ごした山形県大石田町での作である。この三首は、大石田今宿の虹ヶ丘に立つ茂吉の歌碑を訪ねた時の歌であり、歌碑には「最上川の上空にしてのこれるは未だうつくしき虹の断片」(『白き山』昭和二十一年)が刻まれている。

沼のほとりに茂吉の歌碑を見て立てば葦群ひたす水音きこゆ
『夏の記憶』平成十五年

千葉県我孫子市の手賀沼での作である。平成六年に建てられたこの歌碑には茂吉の「春の雲かたよりゆきし昼つかたとほき真菰に雁しづまりぬ」(『白桃』昭和八年作)が刻まれている。

この街の保護樹林とふ樟大樹童馬山房跡近く

『光の中に』平成二十年

「アララギ」に縁ありし身青山にけふ来て茂吉の墓にぬかづく

アララギの枝は茂吉の墓石に影を差したりみかげの石に

東京都港区南青山での作である。青山には茂吉が「童馬山房」と呼んだ自宅やアララギ発行所があり、アララギの会員にとっては忘れることのできない街であった。

二首目の上句は自身がかつてアララギ会員であったことをいう。青山墓地には三つある茂吉の墓の一つがあり、アララギの木が植えられている。

斎藤茂吉を語る縁に半生近く逢はざりし君に見ゆる
同・平成二十二年

両茂吉の師弟の絆克明に綴り続けし日月尊し

君の著書辿る思ひにけふ君の語る「素顔の茂吉」をぞ聞く

秘め事は秘め事としてけふ君の語る事実茂吉を偲ぶ

小題に「茂吉を偲ぶ」とあり、註に「加藤淑子氏五首」とある中の四首である。アララギの歌人であった加藤淑子には、評伝『山口茂吉』『斎藤茂吉と医学』『山口茂吉——斎藤茂吉の周辺』『斎藤茂吉の十五年戦争』『茂吉形影』等の著作がある。

右の四首はその加藤淑子の話を直接に聞いた時の感銘を詠んでいる。山口茂吉は作者の直接の師範幾造の師であった。山口茂吉の茂吉詠については本誌平成二十五年一、二、三月号でありあげた。作者は斎藤茂吉と山口茂吉を直接に知る人の話に引きつけられたのである。三首目の「素顔の茂吉」は斎藤茂吉のことであるが、作者にとっては「両茂吉」のことを聴く思いであっただろう。

楽しい時間 51

山本紀久雄

2016年12月30日

伊藤若冲を佐野市に訪ねる…その二

佐野市立吉澤記念美術館で出あえた伊藤若冲の『菜蟲譜』(さいちゅうふ)、前半五分の三と巻末に88種類ほどの蔬菜や果物が描かれ、後半五分の二には蔓の茂みや池辺を背景に、昆虫・両生類などの「蟲」たち56種類ほどが遊ぶ。この蟲は若冲が森羅万象の命の交響曲といえる『動植綵絵』(どうしよくさいえ)で描いたモンシロチョウやナミアゲハ、カブトムシと同じ昆虫でサイズまで『菜蟲譜』と一致しているという。

今回の『菜蟲譜』公開は、平成28年10月29日～12月11までの44日間。短い。これは文部科学省で国宝・重要文化財の公開に関して「原則として公開回数は年間〇回以内とし、公開日数は延べ60日以内」という基準を設けているため。

さて、佐野市立吉澤記念美術館に入ると、学芸員が別室で詳しく解説をしてくれ、終わると展示場までついてきて、いろいろ質問にも答えてくれるという特別待遇を受けた。

その理由は美術館の名前に関係する。吉澤記念美術館とあるように、地元の葛生で石灰工業を経営している吉澤慎太郎社長が、佐野市に『菜蟲譜』を寄贈し、ついでに土地建物も寄贈されたので「吉澤」名が冠となっている。吉澤家は江戸時代から400年つづく地元の名家で、江戸時代は醸造業を営んでいたが、明治6年(1873)に石灰の製造販売を開始した吉澤石灰工業(株)で、現在の吉澤社長は4代目に当たる。

この吉澤慎太郎社長を、筆者が会員となっている経営者勉強会がインタビューし、その記事が同会の発行雑誌に掲載され、その中で次のような発言をしている。

「従業員的位置づけについては、単に企業を形成する土地、物、金と同一レベルではなく、人間の存在価値を第義的に考えなければならぬというのが私の信念です。そのためには、人頼りではなく、自分で自主的にやる姿勢、現状に甘んじず、進歩発展をめざす姿勢、自分だけよしの姿勢にならず、他人の利益もはかる姿勢が大事になります。そういう考え方に立てば、企業や職場というところは、必然的に人間形成の場になってくるのではないでしょうか」

この内容、どこかで聞いたことがある。というより筆者も同見解で、我が師匠の城野宏が唱導していた「脳力開発」の指針である。

ということで大変興味と関心を持つていたところ、11月8日に吉澤石灰工業(株)の葛生本部と、石灰を採取している鉾山体験見学、その後に『菜蟲譜』も鑑賞できるという企画を経営者勉強会が作ってくれ、東北新幹線の小山駅から、参加者一同でバスに乗り葛生に向かったのである。

今まで様々な企業を訪問して、工場などの現場を視察してきた。だが、鉾山に入るのは初めてで、注意項目として「汚れてもよい服装で参加すること」とある。この指示を守ることは結構難しい。新幹線に乗り込んでいくわけで、あまりにボロでは乗車拒否されるだろうし、銀座に出かける服装では山になじまない。鉾山だから足元は石灰だらけで、多分、靴は汚れるだろう。そのようなことを考えつつ、一応の服装で参加したが、バスから降りた石灰鉾山の現場は、石灰の山を切り崩すダイナマイトの

音が鋭く響き、大型トラクターが走っている。何かの映画で観た場面と同じ光景が目の前に広がっている。

この現場で吉澤社長と名刺交換し、我が師匠のことを聞いてみると、何と、葛生本部まで来て、社員教育をしていることが分かり、経営理念にも取り入れ冊子をつくり、その思想的背景まで詳しく書かれていたので、とても感心し嬉しくなった。

ところで、石灰についてはセメントの原料になるという程度しか知らなかったが、吉澤工業の会社案内を見ると次のように解説が書かれている。

「石灰のもとをたどればサンゴに行きつく。海中のサンゴは二酸化酸素を取り込み、石灰質のカラをつくり、これが巨大になったのがサンゴ礁。これが地殻変動で隆起し地上に出てきて石灰となる。エジプトのピラミッドも石灰でできている」

さて、このあたりで再び『菜蟲譜』に戻りたい。

前号で、昭和2年（1927）の恩賜京都博物館の展覧会に伴い刊行された『斗米庵若冲画選』に掲載されて以来、『菜蟲譜』は所在不明だったが、平成11年（1999）秋、72年ぶりに吉澤家で所蔵されていると公表され、平成21年（2009）に国の重要文化財となったと述べた。



そのことを吉澤社長に確認すると「二代目社長で祖父の吉澤兵左が、近世・近代絵画を収集していて、昭和18年（1943）ごろに入手した。小西酒造から根津美術館にわたって、そこから手に入れたと思う。その後、当家で保存していたが、貴重な国家的財産だから、美術館で公開した方がよいと考え、平成14年に佐野市に寄贈した」と語る。穏やかな人柄から淡々と経緯を話す姿、さすがに400年の歴史を持つ旧家の血筋だと感じる。

『菜蟲譜』は若冲の生涯で唯一の絹本着色の画巻である。本図は5枚の絵絹が4カ所で継がれ、この前後に題と跋（ばつ・書物や書画の巻物の末尾に記す文、後書き）がつく。

若冲の落款は巻末のトウガンの中に「斗米庵米斗翁行年七十七歳画」とある。通常の数え歳では「七十七歳」というのは寛政4年（1792）であるが、還暦以降は改元ごとに年齢を加算したという説もあり、制作年については諸説あるらしい。

最後に筆者の素人考えを述べたい。若冲が画材としたのは野菜（野菜）や果物である。北斎のように当時の景観とか人物像でない。野菜や果物は当時と現代でも大きな変化がない。その野菜・果物があまりにもリアルに描かれているので、それに圧倒されるのではないか。つまり、今の画家は、これほど細密には描かないので、そこに高い関心を呼ぶのではないかと。全くの初心者推測であるが……。



漢詩研修(四)

千代田岳精会 平井茂行

洞庭湖に遊ぶ
どうていこあそぶ

李リ

白はく

洞庭西に望めば楚江分かる
どうていにしのぞきそこうわかる

水尽きて南天雲を見ず
みづつきてなんてんくもみ

日落ちて長沙秋色遠し
ひおちてちやうさしゅうしよくとお

知らず何れの処にか湘君を弔わん
しらずいづれのところにかしやうくんをむらわん

【解説】

七五五年十一月に安祿山が叛乱を起こし、十二月に洛陽が陥落し翌年七五六年六月に長安が陥落したため、玄宗皇帝ら蜀に逃れる。途中で楊貴妃、楊国忠ら殺される。七月皇子 李亨が肅宗として即位。李白は戦乱を避ける意味もあり、七五六年秋から廬山に隠棲し「廬山の瀑布を望む」などを作ったが、同年冬には隠棲をやめ、廬山を下り、安祿山征伐のために永王りん（肅宗の弟）の軍に参加した。しかし肅宗と永王の反目により結局、永王軍は賊軍とされ李白は捕えられ、夜郎への流罪が決定し、七五八年八月、夜郎へ流される。七五九年三月、夜郎に至らぬうち、三峡の巫山で恩赦を受ける。巫山で恩赦に浴した李白は、ただちに長江を引き返し、荊州を経てから洞庭湖へ行った。七五九年の秋のことである。この時、作られた。五首連作の第一首で「唐詩選」に採られている。正式な詩題は「族叔刑部侍郎曄及び中書舍人賈至に陪して洞庭湖に遊ぶ」（ぞくしゆく けいぶじろう よう および ちゅうしよしゃじん かし に ばいして どうていにあそぶ） 李曄 賈至、それに李白の三人がともに流されている身で相伴って洞庭湖に遊んだときの作である。

【語釈】

* 族叔：…姓を同じくする一族で、自分より年長の世代に属する者。実際の血縁関係は無くても、親しさと敬意を表わすために用いることが多い。こもその例。

* 刑部侍郎：…「刑部」は、尚書省の六部の一つ。法律や裁判を担当する。「侍郎」は尚書（長官）に次ぐ副長官、次官。

* 曄：…李曄。唐王室の一族。当時、疑獄事件にまきこまれて、刑部侍郎の職から嶺南（広東、広西）の一県尉に左遷された。その途上、洞庭湖で李白や賈至と清酌の機会を得たもの。

* 中書舍人賈至……中書省（三省の一。詔勅や法令起草する）の舍人（令〔長官〕侍郎〔次官〕に次ぐ職位）だった賈至（七一八〜七七二年）。この前年、汝州（河南省）の刺史となり、翌、乾元二年（七五九）秋、岳州（湖南省岳陽）司馬に流され、洞庭湖畔にいた。従って。この詩は、同年秋の作。第一首は夕方、第二、第三首は夜半、第四首は夜半過ぎ、第五首は夜明け、という構成である。

* 陪……つきそう。目上の人のおともをすること。

* 洞庭湖……中国第二の面積をもつ淡水湖。面積約二七〇〇平方キロ。唐代は中国第一の広さをもち六二〇〇平方キロ、湖周の長さは四〇〇キロに達した。長江、湘江の遊水湖

* 楚江……長江（揚子江）の中流部分、すなわち、楚（湖北湖南）の地域を流れる部分をいう。下流の揚州地域を流れるのが「揚子江」、上流の蜀の地域を流れるのが「蜀江」である。

* 分……長江は西から流れ下り、洞庭湖の東北部分の城陵磯で二つに分かれ、その一つが洞庭湖に流入する。ここでは、「分流」の意と「分明」（はっきり見える）の意とが両義的に重なっている。

* 長沙……現在の湖南省長沙市。当時は潭州とも呼ばれていた。

* 湘君……湘江（湘水）ともいう。洞庭湖に南から流入する大河）の水神。伝説上の堯帝の娘で、伝説上の舜帝の妻となった二人の姉妹。姉が娥皇、妹が女英。舜帝が湖南の巡幸中に没したのを悲しんで、湖水に身を投げて水神となった（姉が湘君、妹が湘夫人）、とするのが唐代詩人における一般的な認識だったようである。「楚辞」（九歌）に「湘君」「湘夫人」があり、湘君伝説の源泉的作品となっている。李白のこの詩は、押韻の関係もあって、姉妹をあわせて「湘君」と呼んだものであろう。

* 起句の「洞庭西に望めば楚江分かる」の通釈に右記の一と二のように差異がみられる。一は「吟劍詩舞道漢詩集」より。二は「岩波文庫 李白詩選」より。

「歴代天皇御製歌」(七十)

貫名海屋資料館

「後光明天皇」第百十代・在位一六四三年(十一歳)・一六五四年(二十二歳)

後光明天皇は、後水尾天皇の第三皇子。御母は壬生院藤原光子。儒学、詩賦を、武芸、擊剣を学ばれ、著書に「風啼集」がある。

この御世、三代將軍家光がなくなり、四代將軍家綱が任ぜられた。

(寛永二十年ー一六四三ー十一歳)

霜の後の松にもしるしさかゆべき我が國民の千代のためしは

(正保五年ー一六四八ー十六歳)

咲きしよりたゞ露の間に山吹の見らくすくなく暮るゝ春かな
住みなれてなれも千年の友よぶや雲居の庭のつるのもろごゑ

(慶安四年ー一六五一ー十九歳)

祝ふぞよこのあら玉の春と共に道もかしこき世々にかへれと

三輪山(4) 卷向穴師 夏目勝弘

唐突に予定を変更して、巻向駅に降りてしまった。歩くしかない駅を出て直ぐ舗装路、案内板があり行くと、JA巻向支店の前に石柱があり、柿本人麿公邸屋敷跡とある。

長年自分のなかで、疑問に思っていたことが解決し、あてもなく降りた不安が消えた。

通りがかりの女性に郵便局を訪ねる、五分程で巻向郵便局に風景を願ひする、その風景印の図柄が大和政権に関わる遺跡からの出土品であると局長の説明、そして巻向考古学通信の冊子にくれた。

それによると「三世紀初頭に突然出現し四世紀初めまで営まれた大規模な集落で、東西二キロメートル、南北二五キロメートル。

また周辺には纏向古墳郡や箸墓古墳もあり、大和政権と関わりある遺跡とみなされ、古代国家形成期を知るうえで重要である」と平城京から藤原京、飛鳥へは、上つ道、中つ道、下つ道の三本の直線の広い道があり、そのうち、上つ道には纏向、三輪山、海石榴市がある。

そして山辺の道等の細い道も多く整備され人々の往来が盛んとなり、万葉集の生まれる土壌が出たのではないかと思った。

穴師の里は急斜面にある集落であり、道も坂ばかりの狭い通りが山際まで伸びている。

穴師の集落の道を二本一本通りながら、両側の家々の名字を見ながら歩いた。

珍しい名字など一つもなく、馴染のある名字ばかり、一つとして同じ名字はなかった。

このような集落では、一族が暮すことが多いため、同一の名字であ

ることが多い。ただ岡の付いた名字だけは多く見かけた。道沿ひの家のみであるため定かではない。柿本の名字を見付け、なんとなく嬉しかった。

穴師の里の所どころに、纏向に関係のある万葉集の歌碑が、有名人の書になり建てられてある。

○三諸のその山並に子等が手を纏向山は継のよろしも(巻七1093) 書 佐藤佐太郎

○ぬばたまの夜のさりくれば纏向の川音高しもあらしかも疾き(巻七1101) 人麿書 武者小路実篤

人麿が穴師の里の妻の所での歌であるう、人麿の公邸から遠い所でも十分もあれば行ける家々ばかりである。

○あしひきの山かも高き巻向の岸の小松にみ雪降りけり(巻十2313) 書 岡潔

○巻向の山辺とよみて行く水の水泡みなわの如し

世の人我は(巻七1269) 人麿書 真庭恭

前日までの雨で、巻向川の瀬音が里のどこに居ても聞こえてくる。川沿いの畑で野菜を摘んでいる女性に、巻向山はと聞く、この山ですと三輪山の並びの三百メートルほどの頂の尖った山を指さす。現在の地図上の巻向山は、女の云う巻向山の稜線に頂が少し見えるのみ。

弓月ヶ岳は知らないと云う。三輪山と平行に里人が云う巻向山の横に少し低い山が並んでいるが、それが弓月ヶ岳とも思えない。

岳というイメージに合わない。現在の龍王山とも思える。

巻向川の瀬音を聞きつつ橋を渡り、三輪山に沿う山道に立つ。里の一本高い柿木に二つ赤い柿が見える。

知識のみで万葉集を読んできたが、こうして現地での発見等目で見、感じることによって、わからなかったことを知ることができた。

「氷魚」のことから (193) 岡本八千代

今日、この稿を書くこうとするに、世の無常を感じ、悲しみの心にペンが重い。

実は、「氷魚」のことから (189) の時 (10月号) に書いた、助川徳是先生が天空の人として旅立ちされたのだ。先生は、私より若くして、「九十歳まで生きることになりました」なんて言つて文学にとりくんでおいでになつたのに……。今もなお、先生のお言葉、「文学の言語表現にとって、技法というのは単に末葉的な技術や手段ではなく、精神そのものに深く関わつたあるものだからである。美しい魂なしに、人は美しい言葉を語ることができない」(先生著「漱石と明治文学」)

なんと、厳しくも魂のこめられた言葉であらうか。なんと、漱石的なユニークさも。

寂しい心のまま、先回のつづきの子規が体操の試験が受けられなかつたので、点数のことが心配で、漱石に尽力してもらいたいことから書いてゆかねばならない私。

当時の体操というのは、兵式体操で、教員は軍人あがりだったので、この先生のところへ漱石は何度も子規のことを陳情に行つて、合格の確約を得た、と言うことであつたよう。その次第を戯文で報知していた。その一部。

○「先頃手紙を以て依頼されたる点数一條おつと承知皆迄云い

給うな万事拙の方寸ありやす先ず江戸っ子の為す所を御覧じるとひま人のありがたさ急に用事の持ち上りたる嬉しがり早速秘術をつくして久米・仙人を生捕り先ず安心はした者の鉄砲ずれで(面ずれより脱化し来るに似たり)手の皮の厚さ二尺もあると云うひなた臭い兵隊を相手の談判は都び男やさ男を以て高名なるやつがれには到底出来やせん引き下りやすと反り身になつて断わると云う所だがそこがそれ君いや妾の爲めで掛けええあれば命の二つや三つは進呈仕りてよろしくと云う位な親切者だからちつともひるまず古今未曾有の勇気を鼓舞して三回戦争の後果も武運目出度乃公の勝利と相成令娘の身体は二年・三・組の室中を横行しても堅行しても御勝手次第なり

定めて

「あらまあほんとに頼もしい事、ひよつとこの金さんは顔に似合わない実のある人だよ」と云われるだろうと乃公の高名手柄を特筆して吹聴することあら／＼如此

九月二十七日夜 朗君より

妾へ

とこの調子であつた。久米・仙人は教務課長か? 子規は自分のことを自ら「妾」と言つたことがあり「妾」は若い娘。郎君はその恋人。

漱石と子規のふざけぶり。そして二人は、明治二十二年九月から二年生になつたのであつた。男同志の面白さをつくづく感じた私。

編集室だより【二〇一六年十二月】

廬山の瀑布を望む 李白

○新しい年が始まりました。便乗して、向学と勇氣と…自身の心を躍らせた。

○横浜、大棧橋、赤レンガ倉庫あたりへ吟行。

アルゼンチンへ引越する時に出航した棧橋が、白長須鯨を彷彿させる面白い素敵な大棧橋に改造されている。強い風が吹き抜けてゆく白いウッドデッキがたまらなく面白い。沢山物思った。

○「これは季語にあるかしら」「今、見ているのに季語には無いからとかいうのは変だね」などなど話しながら、とても楽しい。ランドマーク・タワーの地下の「句会」も、横浜、本当に興味深い。

○「どうしたら良いのだろう」と思い惑っていた換気扇の掃除をする。この頃は油系のものは食しなくなったのに、油系の汚れにたちむかう。

○手作り下さったメ縄が届いた。編集室が、キュッと引き締る。

○地藏尊菩薩の「平手」と「握り手」を彫り終え、二〇一六年度の仏像彫刻クラスを終える。

○「私の所に、いらして下さった「仏様達」ありがとうございます。

○詩吟、吟じ治め。

○短歌「冬ふかき」 明治天皇御製。

冬ふかき池のなかにもほとぼしる水ひとすじはこおらざりけり

短歌「山脈の」 今泉由利作

山脈の向こうにもあり山脈は今日の朝日の届くあまねし

○秋葉原「MORRA」の「DJクラス」へまぎれ込む。「DJ」ということを習おうとした。

「デッキ」はターンテーブルの役割を果し、「ミキサー」は2つのプレイヤーの音を調整して、スピーカーに出力する、この機能を「見た」程のことだったけれど、音楽の後方も意識する出来事だった。

○すみだトリフォニーホールへ。

千代田フィルハーモニー管弦楽団の創立40周年記念特別演奏会。和田三樹（指揮） 富永愛子（ピアノ）。

チャイコフスキー…ピアノ協奏曲、第1番、変ロ短調 作品23。

ジスターコヴィイチ…交響曲、第5番、ニ短調 作品47「革命」。心潤うクリスマスにいたのでした。

○すみだ北斎美術館へ。

「北斎」の生誕地近く、「すみだ北斎美術館」が出来ました。より身近に「北斎」を感じることが出来ます。「北斎」は、和歌も俳句も残して下さいました。

和歌・天我をして五年の命を保たしめば真正の画工となるを得べし

辞世の句・人魂ひとたまで行く気散（気晴らし）じや夏野原

野菜の花（8）

鈴木孝雄



○ ジャガイモ



写真はキタアカリという品種の花です。薄紫の星型の花弁は芋のイメージに似ずなかなか優雅。花の色は、十勝こがねは白、男爵は薄赤紫、メイクーンは紫、と品種によって異なる。7月上旬の北海道、広大な畑に花が一斉に咲き、花見のツアーが出来るほど見事。

写真のキタアカリは花弁が落ち、15mm径程の実がなった。実から種を採って蒔けば、このジャガイモの二世が誕生する。種は採らなかった。ジャガイモは実生では収穫量が少なく、種芋を土に植え付けて栽培するのが常。

しかし、新品種を生むには実生は欠かせない。米国を訪れた方はステーキに添えて出されるアイダホポテトの大きさに驚かれたことかと思う。このジャガイモの品種はRusset Burbank potatoで、その元となったのは、1862年当時13歳のLuther BurbankがEarly Roseという品種の花からの実生実験で発見したBurbank種だ。日本でも、今人気のキタアカリやインカのめざめ等は実生で開発された品種。

ご存知のようにジャガイモはアンデス高原が原産地で、先住民族は約8,000年前から栽培していた。ヨーロッパにはスペイン人が16世紀に持ち帰った。その後、ヨーロッパでの普及には時間が掛かった。太陽に当たると毒性成分が生じること、種芋を植え付ける習慣がなかったためである。19世紀には飢餓対策のため各国で栽培が普及した。

最近、我が菜園でのジャガイモの出来はあまり良くない。モザイク病なのか？ かり肥料が足りないのか？ 野菜作りはPDCAの繰り返しである。

今回はサヤエンドウの花の予定です。

お知らせ

△三月号の原稿は、一月三十一日（火）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することが出来ます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・（〇三）五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美